武士道

Pride of Japan

第8号

BUSHIDO

～今の日本はこのままでいいのだろうか～

武士道格言

その4「日新公いろは歌」

み

道にただ身をば捨てんと思いとれ かならず天の助けあるべし

人として正しいと思う道には、ただひたすら、一身を投げ出す気持ちで真剣にとりかかることです。そうすれば、たとえ最初は辛いことがあっても、必ずや天の助けがあるはずです。間違いありません。

し

舌だにも歯の強きをば知るものを 人は心のなからましやは

よく噛んで食べる。しかし舌を噛むことは滅多にありません。舌でさえ歯の硬いことはよく知っています。まして人においてはなおさらのことです。人の心を察し、その心の動きを感知して用心することです。

ろ

酔える世を醒しもやらで盃に 無明の酒を重ぬるは憂し

迷いの多いこの世の中で、酔ってなお盃を重ねるように、心の迷いを重ね重ねてさらに踏み迷うことは、まことにみじめで情けないことです。

ひ

独り身を哀れと思え物毎に 民には許す心あるべし

年老いて止むを得ず独りぼっちでいる人には、優しくしてあげましょう。また世間の人々や目下の人々には、事あるたびに慈しみ恵む心を忘れないよう心掛けましょう。

も

もろもろの国や所の政道は 人に先ずよく教え習わせ

すべて、国や地域、組織などを治める方法は、まずそこに関係する人々に、やり方進め方や取り決め、規則などを徹底してよく教え、くり返し身につくようにしておくことです。

せ

善に移り過れるをば改めよ 義不義は生れつかぬものなり

もし過ちがあったと気づいたら、ためらうことなく直ちに、正しい方向にやり直せばよいのです。義とか不義とかいうものは、人間の生まれつきのものではありません。どんな人間にもあることなのです。

す

少しきを足れりとも知れ満ちぬれば 月も程無く十六夜の空

ちょっと少ない程度で、十分と思いましょう。月も満月になれば、あとは欠けていくばかりではありませんか。ほどほどにして足ることを知ることです。

「日新公いろは歌」とは

「島津家中興の祖」、「日新公(じっしんこう)」と称された、島津　忠良(ただよし)(1492～1568年)が、5年余の歳月をかけ完成させたという47首のいろは歌。神道・儒教・仏教の三つの教えを基に、人としての生きる道、特に武士として守らねばならない道を説いたものである。薩摩藩の「郷中(ごじゅう)教育」の基本の精神となったといわれる。孫にあたる島津義弘も多大な影響を受け、その後も薩摩武士、士道教育の教典となったこの「日新公いろは歌」は、現代の私たちにも通じる多くの示唆を含んでいます。

解説文引用文献:清水榮一著『島津日新公の教え』(PHP研究所刊)

巻頭言

武士道と騎士道

武士道協会理事
サンマリノ共和国特命全権大使　マンリオ　カデロ

日本に武士道があるように、西洋には騎士道があります。私の国サンマリノにも大変歴史ある騎士団があり、その名は「聖アガタ騎士団」といいます。他にも、西洋にはイタリア王家サヴォイア家「聖マウリツィオ・ラザロ騎士団」があります。

日本では、明治天皇、大正天皇、昭和天皇、伊藤博文公、丹下健三氏、長嶋茂雄氏、そして昨年の晩秋に今年二月に亡くなられた市川團十郎氏が、騎士として迎えられ聖マウリツィオ・ラザロ勲章を受勲されています。この勲章は一九四六年まではイタリアの国家勲章でした。

さて、騎士道には、倫理規範である騎士の十戒があります。それは、勇気、勇敢さ、正直さ、高潔さ、誠実さ、寛大さ、信念、礼儀、親切心、崇高な行い、無私の心、慈悲慈愛の心、清貧、気前の良さ、信仰心、愛国心、弱者を労わることを生きる規範にしてこそ「騎士」と認められます。同じように日本の武士道も人が生きる上での大切な倫理規範であり、勇気、慈悲慈愛の心、忠誠心、無私無我の心、無心、礼儀、知恵、信念、親孝行、羞恥心、名誉、感謝、報恩、清貧を礎にしています。騎士道も武士道も東西の違いこそあれ、人として生きる道を示している内容に何ら変わりがなく、心の支えであり生きる上での道しるべとなっている点では同じと言えます。あえて違いを見つけるならば、女性の扱い方です。騎士道は女性をか弱く守らなければならないものとして扱っていることでしょう。

このように、小さい島国の日本と世界一小さい共和国であるサンマリノは生き方に共通点があります。これからは、この心を意識して協力し、助け合いながら、世界平和に貢献していきましょう。そのためにも、武士道協会とは力を合わせ、地球が平和であるために何をしたら良いか、その倫理規範を発信する必要があります。皆様のご協力をお待ちしております。

聖マウリツィオ・ラザロ勲章

●プロフィール
イタリアのシエナにて出生。イタリアで高等学校を卒業後、パリのソルボンヌ大学に留学。フランス文学、諸外国語、語源学を修得後、大手新聞社コリエレ・デッラ・セーラの出版部門でジャーナリストとしてのキャリアを始める。
一九七五年に来日、イタリアの大手出版社と提携し、主として、イタリアの情報、ルポルタージュ、ニュース等の新聞雑誌を日本に紹介する事務所を東京に開設。
一九八九年に、在日本サンマリノ共和国の領事、二〇〇二年十二月には、日本初のサンマリノ共和国特命全権大使として任命される。
その後、平和大使、在日外交団団長、東京国際大学特命教授、観光庁アドバイザーにも任命される。
その間、サンマリノ共和国より、聖アガタ騎士勲章、聖アガタコメンダトーレ勲章、聖アガタ大十字勲章、聖モリス・ラザル騎士団上級騎士勲章、イタリア共和国騎士勲章等、数々の勲章を受章。
現在もサンマリノ共和国の大使として、また外交団団長として外交活動を継続中。

日本人の心を次の世代に橋渡しする使命

武士道協会会長・茶道裏千家前家元　千　玄室

武士道協会の会長に就いてほしいというご依頼を受けましたとき、果たして私でお役に立てるのかどうか逡巡いたしました。しかし、「茶道」と「武士道」の志すところは一緒であるからと勧められ、お受けさせていただいた次第です。

私の祖先・千利休は茶人であるとともに、禁裏に昇殿を許された堂上人でもあります。さらに、織田信長・豊臣秀吉に茶を教え、茶道をもって政権を補佐した武人でもありますが、戦国の世を生きているにもかかわらず、〝平和〟を唱え続けた人物でもありました。

利休の平和思想はお茶室にも見られます。お茶室の入口はなぜ膝をつき腰を折って頭を下げないと入れないほどに狭いのかとよく問われます。お茶室の入口は「にじり口」と称し、その傍には刀掛が設けられています。そこは織田信長であれ豊臣秀吉であれ、刀を置いて丸腰になり文字通りにじって進まないと通れないのです。〝武〟を構えず、しかも頭を下げて茶室に入室することで、武士や商人などの身分の差のない〝平等の世界〟を茶室の中に創り、平等を身をもって学べるように仕向けてあるのです。かくして茶道は、一盌（いちわん）の茶をもって武将たちに教養をつけさせるだけではなく、豪をもって争いに臨むと必ずや武は武の報復を招くことを教え、武には文をもってあたるべしという文武両道の理を示したのです。

フランスに〝ノブレス・オブリージュ〟という言葉があります。〝貴族には義務あり〟という意味合いなのですが、上に立つものは社会の範となるように振舞うべきという、いわば当時の貴族階級の社会的責任を表しています。ヨーロッパの「騎士道」の精神でもあります。日本においては武家政治の時代、社会的責任は武士にありました。それゆえ、武士は教養・品格を具え、最高人格をもって人に接するという道を弁えて、民を守る防人であらねばならなかったのです。「武士道」はその規範として生まれました。「茶道」もまた然り、ノブレス・オブリージュに相通ずる精神を、利休は一盌の茶で実践していたのです。

わが国では五世紀頃、奈良の大王家によって日本の国づくりが始まりました。平安時代に入ってからは、貴族による公家政治が王政を取り巻いて盛んになりますが、鎌倉時代になり実権が武家に移ると幕府による武家政治が始まります。以後、徳川幕府まで武家政治の安定した時代が続き、明治のご一新に至ります。このような時代の変遷とともに、『古事記』『日本書紀』に記された思想の根本的な心構え・支柱が次第に薄れていき、日本人の心の拠り所・本質が何であるのかが分からなくなってしまったのです。その中で日本人の精神に一つの筋を通したのが「武士道」でした。

日本人の倫理観やノブレス・オブリージュに通じる日本人の精神性に影響を与えたのは中国から入ってきた「儒教」や「道教」、さらには「朱子学」などの教えです。武士階級はそれらの学問を研鑽して修め、「武士道」を築きあげて「仁・義・礼・智・信」を重んじました。この「武士道」の精神こそが、その後、幕末という大きな変革期を乗り越え、諸外国に対しても日本人の矜持を保つ思想・心の支柱となり、今日の日本の礎を築いたのだと言えるでしょう。

ところで、私は昭和十八年に応召され、第一回目の学徒出陣として海軍航空隊に赴きました。そして、昭和二十年四月には、徳島で白菊特別攻撃隊が編成され攻撃命令を待つ身になりました。搭乗員たちは〝死〟を前に、毎日のように「葉隠」や「武士道」の精神、また「大和魂」について話し合いました。それを通じて私は、日本の武士道の精神、いわゆる主君のために忠を

尽くす、それと同時に自分の愛する家族を守る、家族のためなら俺は死ねるという誇りを得ることができました。そして、それが今日まで私の人生を支える力になったのです。私自身は待機命令を受けて命を永らえましたが、仲間を失った忸怩たる思いはいまも消えず、沖縄をはじめあちこちの戦地に赴いては、亡くなった戦友や戦いに倒れた民間の方々の慰霊のために、一盌のお茶を献じております。

ところで、軍隊では「大和魂」が戦意高揚の激励句のように使われました。この「大和魂・大和心」という言葉は、すでに紫式部が『源氏物語』の中で著しておりますが、その意味したところは日本人に本来具わる「和の魂」と、日本人が漢文を読み平仮名を作ったような「和の才」、つまり「和魂和才」のことを指しました。「和魂和才」にあふれた「大和魂・大和心」は、日本人の持つ〝やさしく、やわらいだ心情〟、また〝才に優れた気高い様〟をよく表した麗しい言葉だったのです。

徳川幕府も長く「和」が占める時代でした。しかし、あまりにも長く「和」に依る時代が続いたので、やはり東洋や西洋にも学ばねばいけないという気運が高まり、和の魂で中国・韓国や西欧に学ぶ「和魂漢才」や「和魂洋才」が盛んになりました。そうして国外の文物・思想・価値観が日本に入ってくる一方で、本来の大和魂や武士の魂の捉え方は非常に曖昧になっていったのです。

軍隊では「大和魂を持って一丸となれ」と兵隊を鼓舞する言葉に使われるようにもなりました。そして、「大和魂」を桜花が散る潔さと捉えたり、「葉隠」の〝侍の道は死ぬこと〟が軍隊の一つの掟のようになり、生きて虜囚の辱めを受けることは恥であるとされたのです。この「大和魂」の解釈の仕方から、死ぬことに基本を置く「葉隠」と理想の人間のあり方を説く「武士道」が、外国で誤解されて同一のものと紹介されたことがありました。また、今日でも「大和魂」を口にすると即、軍国主義だ、ナショナリズムだとあげつらう人たちがいることはとても残念なことだと思います。

先般、私はユネスコの親善大使を拝命し、その任命式にユネスコ本部に出向いてまいりました。その折、昨年（平成二十三年）の東日本大震災に対して一盌のお茶の慰みと平和祈願をしてほしいと請われ、各国の親善大使や関係者の方々を前に一盌のお茶をお立ていたしました。そして、被災者の霊にお茶を捧げたとき、会場の全員が起立され、心から黙祷・哀悼を捧げてくださったのは感動的でした。式典の後、各国の大使の方々が、あの大震災で暴動も起こさず秩序を守った日本人の素晴らしさや、自衛隊や消防・警察の人々が被災者のために大きな手助けの輪を広げたことに対して、感動や激励の言葉をかけてくださいました。このことで私は、世界の人々が日本と日本人に対していかに大きな期待を持って見てくださっているかということをひしひしと感じました。

日本はいま震災の復興だけでなく、政治経済も何もかもが行き詰まっています。昨年暮れに選ばれた一文字の漢字「絆」に空虚感さえ漂います。私は、日本人がもっと真剣になって、日本の国を愛し、国に対する誇りを持たなければ、世界からだけではなく神様にも仏様にも見捨てられてしまうと思います。国歌・国旗に対しての敬意を条例化しなければならないほど、いまの日本はお粗末な国になり下がったのかと嘆かわしくさえ思います。誰もが日本がこのままでいいのかどうかを真剣に考えてほしいのです。

私はこの武士道協会が創られたことは非常に有難いことだと考えます。この協会を盛り上げて、日本人の和魂和才・和魂漢才といった精神を現代の若い人たちに教え、受け継いでいってもらえるような役目を私たちは果たさないといけないと思います。日本という国に世界各国がどのような評価を下し、その評価に対して日本はどのように応えていくのか、その〝応え方〟をこれからの若い人たちに与えていかなければなりません。それが「武士道」であり、武士道協会に課せられた使命であることを、いま私たちは真に心すべきではないでしょうか。（談）

●プロフィール
大正十二年京都生まれ。昭和三十九年千利休居士十五代家元を継承し、裏千家今日庵庵主として宗室を襲名。平成十四年嫡男に家元を譲座し、玄室に改名。「一盌からピースフルネスを」の理念を提唱して世界六〇数カ国を訪問し、国際的な視野で茶道文化の浸透・発展と世界平和実現に向けた活動をしている。現在、ユネスコ親善大使、日本・国連親善大使、日本国観光親善大使、ハワイ大学教授、公益財団法人日本国際連合協会会長、公益社団法人日本馬術連盟会長など一〇〇以上の公職、役職をもつ。紫綬褒章、藍綬褒章及び文化功労者国家顕彰、勲二等旭日重光章、文化勲章を受章。レジオン・ドヌール勲章オフィシエ（フランス）、アラブ首長国連邦独立勲章第一級ほか、各国からも多数受章。文学博士（韓国・中央大学院　日本文化センター博士課程修了）、哲学博士（中国南開大学院）。

特別企画
領土問題を考える

領土を守るために

武士道協会副理事長・参議院議員　山谷えり子

私が会長をつとめる「日本の領土を守るために行動する議員連盟」は、平成十六年に発足し、現在超党派の国会議員九十八名で活動している。

これまで、北方領土や竹島の切手の発行要請をはじめ、教育現場における領土教育の充実をはかり、竹島がわが国固有の領土であること、さらにわが国の領域をめぐる問題について理解させるよう求めてきた。また、報道機関に天気予報の際には、北方領土や竹島、尖閣などの天気も示し、国民意識を高めていくことなども提案してきた。長崎県の対馬で不動産が韓国資本に買い占められるなどしている問題では、平成二十年に十一人の国会議員で視察も行った。

また、本年四月には「竹島問題の早期解決を求める東京集会」（「竹島・北方領土返還要求運動島根県民会議」「日本の領土を守るために行動する議員連盟」共催）を開催、そこで採択した特別決議を官邸に持参し、竹島の日の閣議決定を要請した。さらに、香港の活動家らが魚釣島に上陸した直後の八月十九日、領土議連と地方議員連盟、沖縄の漁業関係者、一般の方々と約百五十名二十一隻で、尖閣諸島の洋上で慰霊祭、漁業活動を行ってきた。

また、一議員としても竹島の不法占拠や施設建設問題、日本最西端の与那国島への自衛隊配備、尖閣地域での中国・台湾による領海侵犯、領土領海を守るために縦割り行政ではなく内閣府に専門の担当部局を設置すること等々を、国会で事あるごとに訴えつづけてきた。現在、日本の排他的経済水域（ＥＥＺ）の基点となる離島や無人島は九十九島あるが、そのうちの四十九島には名前さえついていなかったが、国会質問を重ね、やっと今年三月に全ての島の命名作業が終了した。さらに、無人国境離島を国がしっかりと維持・管理ができるよう、前国会に「無人国境離島の適切な管理の推進に関する法律案」を提出することができた。

これら長年にわたる活動が実を結び、今年から使用されている中学校教科書七社すべてで、地図上の記載も含め、尖閣諸島と竹島の記述が明確になった。

このところ中国は、周辺国と領土領海問題を次々と起こしている。アジア諸国から敬愛されている日本は、中国が国際ルールを守る成熟国家として行動するよう諸国と連携し、四方の海を〝みな同胞〟としていかねばならない。

祖先の魂に守られながら美しい歴史を紡いできた祈りの国・日本。

国の主権を守り、領土・領海を守ることは、国会議員としての重要な務めである。

●プロフィール
聖心女子大学卒、サンケイリビング新聞編集長などを経て、平成十二年衆議院議員、平成十六年参議院議員（全国比例区）。内閣府大臣政務官、内閣総理大臣補佐官（教育再生担当）、参議院環境委員長、自民党シャドウ・キャビネット内閣府担当大臣。武士道協会副理事長。主な著書に『日本よ、永遠なれ』等。

特別企画
領土問題を考える

領土防衛をどう考えるべきか

武士道協会副理事長・参議院議員　江口克彦

最近の中国による我が国固有の領土である尖閣諸島に対する全く根拠のない主張や誤った行動は、誠に遺憾である。

特に昨年八月の活動家による不法な上陸や、中国公船による頻繁な領海侵犯などは断じて認めることは出来ない。

この際、我が国の領土・領海・海洋資源を守るために毅然とした態度を示さなければならない。まずは、第一線で国境警備を行う海上保安庁の体制強化が肝要である。巡視船艇の整備・強化は既に進められているが、現場で闘う人員の増強は言うまでもなく、速やかな予算措置が必要である。

その上で、国内法及び国際法上の適切な法執行活動を厳然と執ることが求められる。加えて、領海侵犯罪の新設等の一層の国内法整備について検討を進めることも必要であろう。

さらに重要なのは、海上保安庁の手に負えない事態をも想定して、海上警備行動が速やかに行われるよう海上自衛隊を可能な限り現地に貼り付けるなどの姿勢を示すことも重要である。我が国の憲法では、自衛権以外の武力の行使や武力による威嚇は禁止されているが、海上警備行動は、適法な海上における治安維持活動であり（自衛隊法第八十二条）、これに際し法が許容する武器の使用（同法第九十三条）をためらう必要はないと考える。

さて、毅然とした態度とは、実力の行使を伴うものばかりではなく、中国の無法で不道徳な行為を我が国が教え諭すということも重要である。中国はその数千年の歴史において、孔子をはじめとする偉大な聖人を輩出し、その言行は論語などに代表される書物にまとめられ、中国の人々に崇高な道徳観を示した。その影響は東アジア諸国に対しても及ぼされており、我が国においても尊敬をもって受け入れられ、独自に発展を遂げ高潔な道徳観を醸成した。

しかし、最近の中国による尖閣諸島をめぐる行動はもちろんのこと、一昨年の漁船衝突事件の際にみられた、不当な邦人の拘束やレアアースの輸出規制、今回の日本からの輸出品に対する通関時の嫌がらせなどの国際的なルール無視の姿勢は、ＷＴＯ加盟国であり、世界第二位の経済大国のやることとは到底思えない。いまや、中国においては高潔な道徳観は過去のものであることは明らかである。

むしろ、孔子の論語や孟子にみられた偉大な道徳観を保持しているのは我が国の方であると言わざるを得ない。我が国が毅然として、国際法に基づく解決、国際ルールに基づいた経済活動の在り方などを示すことが、今の中国にとって必要なことであろう。我が国が、これらのことを通じて、今を生きる中国において必要な道徳観を教え示すことにより、今後の節度をもった日中両国の関係構築の礎となると信じて止まないのである。

●プロフィール
昭和十五年二月一日名古屋市生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒、元ＰＨＰ総合研究所代表取締役社長。「地域主権型道州制」の政策を掲げ、平成二十二年参議院議員選挙に出馬、当選。みんなの党最高顧問、党両院議員総会会長。

特別企画
領土問題を考える

我が国に求められる覚悟と防衛政策

武士道協会理事・参議院議員　宇都隆史

「二〇一二年は外交摩擦の年となる」いわゆる二〇一二年問題は、数年前から色々な紙面において注意喚起され続けた。まさに予想された通り、二〇一二年に入って日本を取り巻く東アジア外交情勢はこのほど急速に緊迫感を増し、こと尖閣諸島を抱える日中関係に至っては一触即発の険悪なムードが漂うようになってきている。その異様なまでの緊迫感は、これまで指摘されていた通り「各国の指導者が入れ替わる年であり、国内向けに強いリーダーをアピールすることを求められての政治的意図」という内的要因に加えて、「日本外交の稚拙さが相手国に付け入る隙を与え続けていること」が大きな外的誘因である。

反日運動は我々日本人から見れば、歴史問題であり、領土問題であり、主権に関わる問題かのように映るが、多くの中国人にとってそれはナショナリズムと言いつつも、現状の不満をぶつける矛先でしかなく、中国という経済だけが肥大化した歪な共産党独裁体制を何とか正気に保つための生命維持装置なのである。「反日」が中国にとっての生命維持装置であるからといって、我々がそれに何ら配慮する必要はない。外交は常に自国の国益を真っ先に考え冷徹に行うものであって、かつての英国首相ウィンストン・チャーチルが「永遠の敵国も永遠の同盟国も存在しない。ただあるのは国益のみ」と言ったのは、まさに外交の要諦であると思う。我々は自国ができることを淡々と行い備えを整えることに専念することが肝要である。そこで、尖閣諸島の実効支配力の強化のための具体的提案を幾つか提示したい。

第一に、早急に上陸調査を実施し、国が管理する避難港や灯台、気象観測レーダーや宿泊施設の建設を行うことである。それらの所管は防衛省にし、島全体を防衛省管理地区に指定する。島の上にある施設を自衛隊の管理施設にすれば、自衛隊法九五条の二により、自衛隊の施設の警護を命ぜられた自衛官は、平時における武器の使用が可能となる。

第二に、海上における警察権の行使を担い海上保安官の実行力を強化するため、海上保安庁法の改正を行い、武装した工作船等以外の漁船や公船が警告や命令に従わずに強引に突破するような場合の武器使用基準の緩和や、船員に死傷者が出た場合の保安官の違法性阻却要件の拡大を行う必要がある。

第三に、現在日米地位協定上、米国の射爆撃場に指定されている久場島、大正島について、日米地位協定の改正を行い、日米共同の軍事射爆撃場に指定することである。現状において、我が国は国内に実爆弾を伴った射爆撃場を持っておらず、わざわざグアムまで行って実施しているのが実情である。航空自衛隊が実際に年一回でも射爆撃場として活用すれば、これに増した実効支配はない。

第四に、核保有に関する議論を活性化させることである。中国の最大のカードは、核保有国であるという事実である。我が国の生存のために核保有をするとしたらどのような選択肢が考えられるのか、政府として検討する期間を設け議論を深めることをすべきである。

このように日中の外交摩擦の激しい中、我が国は憲法改正を前面に訴え選挙戦を勝利した安倍晋三総理をリーダーに掲げた。その新たな宰相に求められる外交の資質として、中国の古人、冒頓（ぼくとつ）を取り上げたい。中国は秦の時代、匈奴（きょうど）という国を治める君主に「冒頓」という人物がいた。

冒頓が君主になってすぐ、隣国より使者がやってきた。使者の目的は、若い君主を翻弄し隷従させてしまうことにあった。使者の口上は「君主即位の挨拶と、両国の共存の印に亡父の駿馬を進呈されたい」という高圧的なものであった。側近らは「駿馬は遊牧民の宝であり、即位の挨拶に進呈すべきものではない」と進言したが、冒頓は「馬ならばまた生まれてくる。共存すべき隣国に対し、たかが駿馬一頭を惜しむべきではない」と言い、隣国へ駿馬を贈った。味を占めた隣国は、再度使者を送ってきた。「両国の安寧と友好のために、冒頓の后の中から最も美しい一人を迎え入れ、縁組をしたい」と申し出た。同様に冒頓は側近を集めて意見を聞いた。側近らは「常軌を逸した非礼な態度である。友好などと綺麗ごとを言ってはいるが、后を差し出せなど押し込み強盗と変わらない。外交関係を断ち切るべきである」と進言したが、冒頓は「后ならば、また新たに娶ればいい。心同じくする隣国に対し、たかが后一人を惜しむべきではない」と言い、隣国へ后を贈った。しばらくして、また隣国の使者がやってきた。使者は、「我が国と貴国との間には、国境の千余里の荒野があります。近年使用もしていない荒地のようであるので、我が国が占有し耕作地として活用したい」と申し出た。冒頓は使者を待たせた上で、側近を集め意見を聞いた。意見は賛成と反対に二分された。冒頓は賛成する側近らへその理由を聞いた。側近の一人が代表して申し出た。「国境の荒地は良い牧草も生えず、我が国を富ますような価値は見出せません。隣国の大使の真摯な態度からも、昨年の不況により困っている様子が見て取れます。あの土地ならば与えても構わないでしょう」。冒頓は聞き終わると同時にすくと立ち上がり、良く通る声で一喝した。「領土は国家の根幹である！　祖先の土地を与えても良いと言った者と隣国からの佞姦を斬り捨てよ！」と、その日のうちに戦支度を整え、愛馬にまたがるや「全臣民に告ぐ！我に遅れたものは斬り捨てる！」と隣国へ攻め入り、完全に油断していた隣国の王を弑し、宝物は奪い、民は奴隷とし、あっという間に隣国を滅亡させた。

このエピソードから我々が学ぶべきことは、「領土を守るということは国家の根幹を守るということであり、また、国家の威信を守ることである」という外交の鉄則である。領土に関する外交には、かつてフォークランド紛争時にイギリスの鉄の宰相マーガレット・サッチャーが見せたような、国家指導者としての断固たる覚悟と勇気が求められるということである。我が国も新たな宰相の下、真にあるべき独立国家としての体制構築に全力を注がねばならない。それが極東におけるパワーバランスを安定化させ日米同盟を強固なものにし、外交の隙を防ぎ、覇権的な野望を持つ大国からの不当な介入や経済圧力を撥ね除けるための外交の正道であるということに、日本国民我々は気づかねばならないのである。中国の台頭を平成の黒船と捉え、自虐的配慮外交から脱却するトリガーにすることができれば、地政学的に横暴で困った隣人を持ったことは、日本にとって決して不幸なことばかりとは言えないだろう。

●プロフィール
昭和四十九年　鹿児島市生まれ　県立鶴丸高校卒業、防衛大学校（第四十二期）卒業。
松下政経塾（第二十八期・H十九～H二十二）卒塾、航空自衛隊西部航空方面隊司令官副官歴任。
参議院議員（全国比例区）自由民主党（二十五、一現在）
安全保障関係団体委員会委員長他。
柔道三段、剣道二段　座右の銘「敬天愛人」
日本に生まれたすべての国民が、「生まれ変わるなら、また日本がいい」と思える国づくりに全力を尽くします。参議院委員会、特に外交防衛委員会委員として国益遵守や独立国たる安全保障環境構築の観点で意見を主張してまいります。また国防部会副部会長として、防衛の諸問題の解決に取り組んでまいります。

特別企画
領土問題を考える

領土問題を宇宙の視点から考える

東京外国語大学名誉教授　奈良　毅
武士道協会常務理事兼事務局長
研修のラインエイジ社長　本多百代

最近は日本の周辺国が領土問題で騒いでいますが、竹島も尖閣諸島も北方四島も、日本人の我々にとっては、思い入れのある大切な日本固有の領土です。しかし、同時にそれはまた、母なる地球のものでもあります。

私たちは、自分の肉体は自分のものだから、何でも自分の思い通りになるものと勘違いしていますが、心臓や胃や腸に対して自分の意識が多少影響を与えることはあっても、自分の思い通りに動かすことなど到底できるものではありません。心臓をもし自分の意思で止めたり動かしたりすることができるなら、自殺も他人に迷惑をかけることなくもっと簡単にできるでしょうし、逆にもう少し長生きをしたいと思うなら、いくらでも長生きできるはずです。しかし、それぞれの臓器に、我々の意識が多少の影響を与えることはあっても、思い通りにすることはできず、人間の生命を司る脳の統括の下に、それぞれの臓器が他の臓器と互いに共生しながら動いている、という事実を直視しなければなりません。

つまり、我々人間は、母なる地球という大自然の細胞の一つとして生かされているのであって、「人間も宇宙の腹の虫」と言った坂本龍馬の人間観が意味するように、世界各国で起きているあらゆる現象は、地球が自らの体を健全に保つために起こす浄化作用なのだ、と考えるべきなのではないでしょうか。

地球という母から生まれた世界各国は兄弟姉妹なのであり、それぞれに個性があり成長（発展）の差はあるものの、母にとってはいずれも大切で愛おしい子供であることに変わりはありません。自分の子供同士が財産問題で争い喧嘩しているのを見た場合、直ちに争いを止め、仲良くしてほしいと願うのが、親として当然の思いでありましょう。武士道においては、兄弟姉妹の間で、自分より弱い者や小さい者に対しては、労りの心と惻隠の情で接し、しかし、悪いことをした者に対しては、お前は悪いとはっきりと諭し、悪事を止めさせなければいけません。

日本は、領土問題に関しては、悪いことをした他国に厳しく諭してこなかったツケが今来ているわけですから、今後どのように他のアジア諸国に接したら良いのか、を真剣に考える必要があります。平和な解決方法は必ずあるはずです。軍事力によって解決しなければいけないなどと、勇ましいことを言う日本

人もいますが、今、いったいどれだけの国民が、本気で自分や子供の命を国のために差し出そう、などと考えているでしょうか。

過去の歴史と現在の実情、そして将来のあるべき姿について、大人も子供も徹底した教育を始めなければなりませんし、それによって得た知識と覚悟でもって交渉しない限り、何もかも思うようにはいかないのではないでしょうか。

●共同開発を提案する外交術

今から何年も前になりますが、元共同通信の中村明さん（『技癢の民』の著者）が、日本がイラクに自衛隊を派遣する際に奈良毅先生からアドバイスをいただき、外務省の高官に伝えて実行されたことがあり、それにより日本の派遣隊は一人も死者を出すことなく帰国しました。それは、「現地に降り立ったと同時に現地の人に聞いて、現地の神様（イラクの場合はアッラーの神）のいらっしゃるアカバの神殿の方に向かって、我々はイラク人の安全と公共福祉のためこちらに赴任してまいりましたからどうぞよろしくお見守り下さいと挨拶(現地の方法で祈りを捧げる)をされたら良いでしょう」ということでした。その様子は、テレビで世界に配信されましたが、これは、私たち日本の自衛隊員は、あなたたちを支配しに来たのでも干渉しに来たのでもなく、イラクの人々の安全や福祉のために奉仕に来たのです、ということをアッラーの神の前で誓った姿を、身をもって示した実例なのです。

その中村さんから、今回も奈良先生に領土問題について質問がありました。

質問：今回の尖閣諸島問題の背景には、やはりペルシャ湾並みの石油資源がその付近に埋蔵されているということがあると思います。そこで、尖閣諸島が日本のものだとか、中国のものだとか、台湾のものだとか、その国々によって見解の相違がありますが、この問題を穏やかに解決させるには、どのようなアプローチが有効でしょうか。

奈良先生：中国が突如、尖閣諸島に関心を持ち出したのは、国連が資源調査をして石油が出るとわかってからですね。中国は今世界中に投資して、石油を手に入れたいと思っていますから、それが近くにあればどうしても手に入れたいと思うに違いありません。しかし、そういう裏の事情は、国民に明かさず、歴史的に自分たちの領土であるという教育を一生懸命しているわけです。それではどうしたらいいのか？

台湾の場合は割合簡単で、我々は島を欲しいとは思わない、ただ漁業権が欲しいので、台湾の漁船が尖閣諸島の近海で操業するのを認めてくれればいいのだ、と言っています。中国の場合は、単なる漁業問題だけではなく、島そのものを自分のものにして油田開発したいのですから、強硬に島の領有権を主張してきています。あんな小さな島を、あんなに膨大な領土を持つ中国が、どうしても領有しなければならないということは、おかしなことですが、石油資源の獲得に血眼になっている中国としては、なりふり構わず主張しないわけにはいかないのかもしれません。

さて、それでは日本はどう対処したらいいのでしょうか。

一、全く無視する、のも一つの手だと思います。

二、公に言うか、秘密裡に私的な場で言うかは別として、あなたたちが欲しいのは島ではなくて油なのですね。それなら、共同開発しませんかとはっきり言い、島そ

のものがどちらに帰属するのかは一旦棚上げにしておき、共同で金と技術を出し合って油を折半する、という提案をしてみたらどうでしょうか。

そうすれば、中国は尖閣諸島が自分の領土であるとかないとかは当分言わなくなるはずです。そういう外交術を、日本の政府はとるべきだと思いますね。今のところの妙案といったら、それしかないのではないでしょうか。島の領有権に関する主張はどこまで行っても対立し平行線をたどるだけだと思います。

●武士道を究めることが平和社会を築く

このように奈良先生はおっしゃいました。これで日本人が納得いくかいかないか？　本当に矛を収める生き方をしているのか否かが、武士道を究めた人に求められるのではないでしょうか？　地球の資源を独り占めしようとしたら、大東亜戦争の繰り返しとなってしまいます。日本人は戦争を選ぶ道しか残されていなかった、と未だに思っている人がいるようですが、厳しいけれどももっと賢明な方法や手段はあったはずです。

母なる地球の資源を、兄弟姉妹同士が工夫して共同利用する方法を、日本が率先して考え提案してみてはいかがでしょうか。こうした心や工夫が、平和への基礎を着実に固めていくのだと思います。心が広く大きな人や国だからこそ、周囲が意見を聞こうとするのではないでしょうか。ここで一回り大きな人間となり、改めて紛争を解決し平和な人類社会を築くには何が大切かを考える必要があるのではないでしょうか。

それには、

一、母国日本に誇りをもち、最高の国だと思える教育をすると同時に、どこの国も同じだけ重要でそれぞれに素晴らしいところがある、ということも教える

二、天皇家の本来の生き方から学ぶ。自分の家族だけを愛するのではなく、誰のことも分け隔てなく大切にする

三、自分に自信と誇りをもち、礼節と五倫（父子、君臣、夫婦、長幼、朋友）を大切にする（相手のプライドを守ること、親孝行、信頼関係などにつながる）

などが最低必要な条件となるのではないでしょうか。こうした基盤がない人の判断は、とかく偏りがちで説得力も人心を掌握する魅力もないように思えます。

記憶詰め込み教育を変えること、利他を心がけ、国際間の交渉術を身に着け、日本は素晴らしい国ですと国民の誰もが胸を張って言う日が来た時に、外国諸国も日本を大切な兄弟国として扱ってくれるようになることでしょう。

●奈良　毅氏プロフィール
一九三一年　秋田市生まれ。東京外国語大学名誉教授。清泉女子大学元教授、秋田大学学芸部国語国文学科（学芸学士）、東京大学大学院人文学科研究科言語学科（文芸修士）、インド共和国カルカッタ大学院人文学研究科比較言語学科（哲学博士）
一九六四年より三〇年間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所勤務、現在同大学名誉教授。その間、国内外の七大学で教授・非常勤講師歴任。
一九九五年より八年間、清泉女子大学勤務（同大学言語文化専攻主任教授、人文科学研究所所長、地球市民学科主任教授）
（財）日印協会顧問、（財）オイスカ顧問団長、日本バングラデシュ協会顧問、（財）ラボ国際交流センター評議員、バングラアカデミー終身会員、日本言語学会維持会員、日本南アジア学会会員
活動：祈りによる広島平和市民運動代表、世界平和と少数民族の言語文化及び球環境保全のための運動

●本多吉代氏プロフィール
人材育成コンサルタント。社員研修のラインエイジ社代表取締役社長。武士道協会人間力向上セミナー講師。武士道さむらいすくーる講師。大学特別講師（中央大学、大妻女子大学、神奈川大学、大東文化大学 etc）を歴任。教育委員会、ロータリークラブ、青年会議所、商工会議所、中小企業同友会、農協、新聞社、一般企業、倫理法人会、などで講演。二〇一〇年全会津文化祭会津エンジン講師。中日研修センター（中日新聞名古屋本社販売局）で組織開発と人材育成を八年間、その後、中日新聞東京本社企画開発室にて企業内研修講師として四年間勤務。平成十七年人材育成&研修会社のラインエイジ社を起業し代表取締役社長就任。平成十九年NPO法人武士道協会を創設し、常務理事兼事務局長に就任。

特別企画
領土問題を考える

西洋科学と東洋哲学の統合

武士道協会参与
横浜船員保険病院　副院長・外科部長
長堀　優

今回の特集は、尖閣諸島をめぐる諸問題についてですが、一医師に過ぎない私が、外交問題に関しての深い考察を加えることはできません。しかしながら、このような私にもはっきりとわかること、それは、いかにこの地が漁業や資源開発の上で重要な位置を占めようとも、この混沌とした世界情勢の中では、中国と争うことなく、韓国をも含め東アジアの国々がともに協力し、東洋的価値観を取り入れた新しい社会を築くべく努力することこそが最重要であるということです。中国の〝脅威〟の下に沖縄の基地が強化されているのを見れば一目瞭然ですが、日中韓が、強力な経済圏を作ったら困るのはどこの国か、そして、中国から日本が撤退したら、さらに中国と日本が戦争など始めたら得をするのはどこの国かをよく考える必要があるでしょう。

東洋哲学に傾倒した西洋科学の巨頭たち

近年、我々が規範としてきた東洋の伝統的哲学が見直されています。信じられないことに、東洋哲学は、量子力学をはじめとする西洋の最新の科学と数々の共通点を有しています。なぜなら、ボーア、シュレジンガー、ハイゼンベルグらの量子力学の巨頭たちは、デカルト以来の善悪を明確に分ける西洋的な二元論を離れ、最終的には、古代中国の易経、インドの叙事詩、ヒンドゥー教の聖典など東洋伝統の哲学に傾倒し、大きなヒントを得て学説を構築しているからです。その理由が、東洋哲学が、最新の物理学が解明しつつある宇宙観をすでに明らかにしているから、というのですから驚きです。

この量子力学は、宇宙の合一性、非局在性を明らかにすることで、ニュートンの古典物理学、アインシュタインの相対性理論の限界をはっきりと示しています。さらに最新の細胞生物学や分子生物学は、個々の細胞が、知性・感性をもち、その振舞いや遺伝子の発現さえも、エネルギーで変わりうる可能性を示しています。このエネルギーには、想念も含まれることが明らかになってきました。つまり細胞の癌化すら人間の負の想念で起こりうることが、科学的な言葉で説明されつつあるのです。

東洋哲学に隠された幸せに生きるヒント

しかし、残念ながら、医療現場で主流となっている西洋医学を支配するのは二元論であり、悪である病気・死を敗北、恐れの対象と捉える現在の医療環境下では、患者さんはストレスにさらされ続けます。これではよくなるはずの病気もよくなるはずはありません。一方、西洋の二元論に対し、わが東洋には善悪不二という考えがあります。〝病になって、そして死を意識することにより初めて見えてくる大切なものがある、善悪は絶対的なものではない、善も悪も分かち難く、時々によって移り変わる〟、と考える東洋哲学にこそ幸せに生きるための重要なヒントが隠されているように私には思えてなりません。

西洋の科学も、東洋の哲学も、本来反発しあうものではなく、互いに補い合う欠くべからざる車の両輪である……このような想いのもと、今後の医療、ひいては社会を考える必要があるでしょう。

●プロフィール
群馬大学医学部卒業、現在、横浜船員保険病院　副院長・外科部長。専門は消化器外科。
現代の行き詰まった物質文明においては、西洋医学と東洋哲学を融合した新たな生き方が必要との考えのもと、衆議院議員会館における超党派国会議員連盟の会をはじめ、全国で講演活動を展開している。
日本外科学会指導医、日本消化器外科学会指導医、神奈川胃癌治療研究会・世話人、消化器がん治療医認定医、信州大学医学部組織発生学講座（佐々木克典教授）・委嘱講師

特別寄稿

武士道と日本刀

武士道協会参与・刀鍛冶
松田周二
刀工名　松田次泰

日本では鉄器が弥生時代に武器として使用されだしてから、刀には約二千年の歴史があります。平安時代中期ぐらいに刀に反りがついてからを日本刀といいます。それまでは、反りのない直刀（ちょくとう）でした。聖徳太子の絵に見られるものです。それが平安中期ころに反りがついて、物として残っているのは平安時代後期からのものです。この時代の日本刀は、国立博物館やその他の美術館、博物館などで見ることが出来ます。なぜ反りがついたか、ハッキリしたことは解りません。

その反りのついた平安後期の日本刀から現代の平成まで、約千年間の刀を日本刀といいます。それまでの直刀は上古刀（じょうことう）といい、日本刀とはいいません。その平安後期から室町時代後期までの日本刀を古刀といいます。それから江戸時代中期までを新刀といいます。幕末ころの日本刀を新々刀（しんしんとう）といい、明治から平成までの日本刀を現代刀といいます。我々が今作っている刀は現代刀といいます。

日本刀の良いものは大体、鎌倉時代に集中しています。いまから二百年前、幕末ころに水心子正秀という刀鍛冶が、日本刀はすべからく鎌倉へ帰ろうという復古刀宣言をします。それから以後、刀鍛冶はこの古刀期の鎌倉時代の日本刀を再現することが目標になりました。目標というより、刀鍛冶の大きな仕事になりました。この八百年前の鎌倉時代の刀を再現した刀鍛冶はまだいません。

日本刀の材料である鉄は、和鉄（わてつ）といって、現代の溶鉱炉で出来た洋鉄（ようてつ）とは、大きく違います。この砂鉄と炭で還元した和鉄でないと日本刀は出来ません。この和鉄も明治時代初期に洋鉄に押されて途絶えました。我々、刀鍛冶は刀を作るのも仕事ですけれど、この日本刀の材料である鉄を作るのも、大きな仕事の一部です。

日本刀は武士道の精神をかたちにしたもの

自分たちが最初、日本刀を勉強するとき、日本刀には三つの大切な要素があると教わりました。第一に日本刀の機能性。第二に日本刀の美術性。第三に日本刀の精神性。私にとってこの一、二はある程度、技術的なものですので理解できますが、最後の精神性が実にやっかいに思われました。武士道などもこの範疇に入ると思います。極端かも知れませんけれど、武士道の精神をかたちにしたものが日本刀ですから。

さらに面倒なのは、刀が三種の神器に入っているということです。要するに刀が神になっている訳です。そういうものだとただ単純に思うのは簡単ですけれど、刀鍛冶として自分の作った刀から、これを感じるのは、他の鍛冶屋は知りませんが、私には理解するのは大変でした。

日本刀には名刀（めいとう）という言葉があります。名刀の条件として切れる、切れないは余り関係ありません。切れない日本刀はありませんので、美しいものが名刀です。これは日本刀が出来たときからそうです。

本居宣長の歌に、

「敷島の大和心を人問わば
朝日に匂う　山桜花」

があります。

日本刀を見たとき、刃文が見えます。これを匂口（においぐち）といいます。この匂口の匂（におい）と、朝日に匂うの匂いは同じ意味です。歌の方は山桜が朝日に反射して、ひかり輝くという意味です。ですから刀の匂口は光に透かすとひかり輝かなければならないのです。古名刀は概ねこの輝きを持っています。ですから新刀期の匂口の輝きと、新々刀期、現代刀の匂口の輝きとは大きく異なります。

古名刀を光に透かして匂口をじっくり見ますと、刀の持っている生命力が見ている人にそのまま移行してきます。

昔、日本では、生命力の強いものを神としました。ですから自然にある山とか巨岩、巨木その他、生命力の強いもの、動物では蛇などを神として崇めました。人工的に生命力の強いものとして三種の神器（八咫鏡（やたのかがみ）、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）、天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ））があります。

刀はそういう生命力の強いものでなければなりません。ですから如何しても日本刀が日本刀になった初期の平安末、鎌倉初期の技術が必要です。

武士道も日本刀も自然の理法と共に生きる

鎌倉の技術の再現に和鉄（玉鋼（たまはがね））の性質を理解することが必要です。この和鉄は非常に扱い難い性質を持っています。それを扱い易くしたのが、現代の鋼、ヤスキ鋼（はがね）です。人は扱い難いものをすぐに扱い易くしようとしますけれど、和鉄のこの扱い難いという性質が実は大変重要なのです。この性質を逆に利用すると鎌倉時代の作品に非常に似たものが出来てくるのです。ですから余り手を加えずに和鉄のあるがままの性質を生かすのです。特にこの二百年間の古刀再現を難しくしてきたのは、和鉄を現代の科学、洋鉄の冶金（やきん）とか熱処理で考えようとしてきたことだと思います。和鉄と洋鉄では、同じFeでも、まったく別物なのです。

武士道協会の武士道憲章、「第一、武士道は、天地自然の理法と共に生きる」とあります。実は和鉄もこの自然の理法に従って鍛錬し、熱処理するとそれほど苦労をしなくとも相当質の高い鎌倉期の作品が出来てきます。

「天地自然の理法と共に生きる」。文章にすると簡単ですけれど、これを現代の自分の生活の中で理解するのは非常に難しいと思います。やはり日本古来の物の考え方である神道であるとか、東洋哲学である儒教などが必要になってくると思います。そういう意味でも武士道協会の存在が非常に重要になってくると思います。それと共に、それらの精神をかたちに現したものである日本刀の存在も非常に重要であると、刀鍛冶になって三十年以上過ぎた現在、ヒシと感じるようになりました。

●プロフィール
一九四八年生まれ北海道出身。北海道教育大学特設美術学科卒業後に、人間国宝・刀匠・故宮入行平師の弟子である刀匠・故高橋次平師の一番弟子として入門、日本刀の製作を始める。
一九九六年に新作名刀展で協会会長賞を受賞。以後特賞を数々受賞し、二〇〇六年には最高賞の高松宮記念賞を受賞する。二〇〇四年、熱田神宮にて公開鍛錬を実施し、製作した日本刀を奉納した。二〇〇九年に無監査認定。

【支部設立のお知らせ】

待望の福岡支部がいよいよ設立されます。
全国の皆様のご出席を心よりお願い申し上げます。

『福岡支部設立記念総会・講演会・交流会』

日　時　平成25年6月29日（土）15時30分開会
会　場　ホテルクリオコート博多4F（博多駅筑紫口前）
TEL 092-472-1111
会　費　8000円（交流会費含む）

当日は、本多百代（常務理事）、宇都隆史（理事・参議院議員）のお二人をお招きし、今も私たちの社会生活で活きつづけている日本武士道の心について講話を頂く予定です。日本人が潜在的に持っている大和心・武士道の心に目覚めることこそが緊急の課題でしょう。全国の心ある皆様、福岡のご友人にお誘いをお願いいたします。

第一回
《異道シンポジウム》

武士道
Pride of Japan

何故、《異道シンポジウム》なのか?

人生をどの様に生きるべきかを思索していた首都圏本部設立準備委員会のメンバー達が自分たちで行動しようと思い立ち、日本に生きるそれぞれの『道』、柔道・合気道・空手・少林寺・茶道・書道・香道・装道…、の通ずるところを学ぼう、となりました。

これら全ての『道』が武士道に通じているわけであり、究めた方々の目指す「心意気」を伺い、平素の暮らしの中で実践していくことが我々会員の役割なのではないかと考えたからです。

日　時：平成25年6月16日（日）
13時～16時

場　所：湯島天神　梅香殿

参加費：会員1,000円、非会員2,000円

講　師：未定（ご推薦を受付中）

主催：武士道協会首都圏本部設立準備委員会

協力：特定非営利活動法人 武士道協会

お問い合わせ先

担当:青山 080-6762-9202　岩瀬 080-5974-7841

※初めての試みですので、至らぬ点が多いと思います。参加人数もパネラーも未知数です。しかし、何が飛び出すかわからない楽しさも秘めております。我々武士道協会会員が道を極めることに一歩でも近づくことで、人として社会の平和の為に何ができるかの共通認識を持てることでしょう。今後も継続して開催していく所存ですので、是非この手作りシンポジウムにご参加頂き、ご友人など大勢の方にお声をかけて頂けますよう、心よりお願い申し上げます。

編集後記

8号では、領土問題を扱ってみましたが、武士道を志す人々の視点も様々あることが分かります。どれも貴重な意見で、それぞれに頷いたり首を横に振ったりしながら読んで下さることと思います。大切なことは自分の意見をしっかり持った上で、他者の意見を否定せず尊重しながら最小公倍数と最大公約数を探すところではないでしょうか。それを日本人は『和』と表現し、和を重んじる日本人の心を『大和心』としているのではないかと思うのです。地球に暮らす人々は全て運命共同体。敵味方に分かれて戦ったとて、いずれは一つになって協力し合わねば生きていけない間柄。平和とは、そのことに気付き、自分だけが良くなりたいという我欲を捨て利他を求めた時に訪れる心の平安と言えるのではないでしょうか。その境地に一歩でも近づくためには、武士道ほど役に立つ生き方はないと自負して武士道8号の締めくくりをしたいと思います。今年からの武士道協会は、各支部での活動を重視してまいります。東京、京都に加えて福岡でも人間力向上セミナーを開催してまいります。一緒に作り上げていきませんか、武士道協会を。

武士道協会事務局
〒163-1320　東京都新宿区西新宿6-5-1　新宿アイランドタワー20階
TEL (03) 5325-2660　FAX (03) 5325-1618 URL : http://www.bushido.or.jp/

特定非営利活動法人
武士道協会
●武士道第8号
●平成25年4月発行

©武士道協会 2013 Printed in Japan.　無断転載はご遠慮ください。